
E.V.B !

リンリン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

E・V・B！

【Nコード】

N0262C

【作者名】

リンリン

【あらすじ】

近未来の話。人工増加対策として作られたサイバー空間に住む人々が多くなった。だがこの画期的なシステムにも欠点があった。新しい形のアクション・SF・ファンタジー。

ブログ（前書き）

連載開始。ノロノロ更新ですが、宜しく。気まぐれですので、ランダム更新です。

ブローグ

株式会社シスプラチナに勤めるOLの由岐は、げんなりとしながら自宅に帰るためにニユウアイランド（この町の住人はN・Iと呼ぶ）の中枢であるN・Iタワーへ向かっていた。

由岐は子どもの頃からファッションが好だった。それは今の生活になんの疑念もなく着いてきていて、今勤める会社は無論服のデザインを司る人気ブランドだ。それをそのまま受け入れた。

好きだ、と言うことは才能よりも強いと信じてきた。だが、同僚の愛花に負けた。今日は会社の中でも優秀な人材が集まり、この夏の新作案を出す会議があったのだ。由岐は入社以来自分の好きだ、を信じて頑張った。それは結果を読み、由岐は昇格した。当たり前のように思えた。だから、今日も自分の案が採用される自信があったのだ。

だが、負けてしまった。由岐でさえ欲しくなるようなデザインだった。誰もがこの季節ごとにある会議に初登場の筈の愛花を天才として見ていた。

そう。由岐でさえも。由岐は完全に負けた。敗北したのだ。

N・Iタワーの入口ドアが圧搾空気の抜ける音がして、メタルのドアが開く。このN・Iに住む人殆んどが、このN・Iタワーの中にあるコンピュータ（PC）の中に作られたサイバー空間に住んでいる。

今から約二十年前に人工の増加に備え、物や人などを電子化してサイバー空間に表示するシステムと同時に、電子物を実体化するシステムが完成したのだ。だから、大都市もといN・IにはN・Iタワーのような場所があり、その外は殆んどが会社や裁判所などの国家施設で埋め尽されているのだった。

ところが最近になりこの画期的なシステムにも欠点があることがわかった。ある日、サイバー内の一部の住居が表示されなくなった

のだ。サイバー空間にはそれぞれ管理者がいるが、その管理者は難しい試験をパスしなければ資格がもらえないため、管理者のミスは皆無と言っても良い。驚いたその管理者が原因を解明したところ、なんとサイバー内にウィルスの存在が確認された。

以来、サイバー内にウィルスが侵入した場合、その付近に住むサイバー住人（私達はC・Pと呼ぶ）に警告し、ウィルスを除去するまでは帰宅させないシステムになっている。

サイバー空間の現状を伝える電工掲示板には由岐の自宅付近にウィルスが侵入した事が表示されていた。だが、由岐は気付かなかった。今日の出来事が衝撃的過ぎた。

N・Iに限らずウィルスがサイバー空間に侵入したことは滅多に無いために、どうせ何も無いのだろうと由岐は掲示板を確認する事無く自宅への帰路にインストールした。

真っ先に由岐の目に飛込んできたのは、いつもの自宅の光景でなく、黒いドロドロとした物体と青い小さな人か何かだろうか、そんな物が争っている光景だった。もしかしてインストールし間違えたのだろうか。そう考えたが、自らの足元に由岐が気に入って購入した表札が落ちていたため、間違っていない事とこれは不味い状況なのではないかと言う事がわかった。

と、不意に黒い物体が舞い上がる。人か何かが蹴りあげたらしいとは言っても人か何かとその物体は大きさが十倍以上違うため、由岐は最初信じられなかった。

物体が攻撃してこない隙を伺い、青い小さな人か何かが由岐に接近してくる。接近してくる内にわかった事がある。青い小さな人か何かは――

「男の子……？」

由岐が啞然として立ち尽くしていると、かなり近くまで来ていた少年は顔をしかめ、何かを叫び出す。が、由岐には聞こえなかった。数秒後、大きな影が由岐を覆うのを感じるのと同時に、由岐は少年に抱えられていた。

金髪が由岐はの顔にかかる。

「アンタ、なに帰って来てんだよ！」

由岐は自分が先程までいた場所にあの黒い物体が落ちるのをみて毛が立つのを感じた。

「なあ、おネエさん、聞いてるか？」

頬を軽く叩かれて漸く正気に戻った由岐に少年は同じ質問を繰り返した。

「いやあの、掲示板見てなくて……」

少し後ろめたい気持ちで言うと、ジャニーズに入れるのではないかと云うくらいの顔立ちが一気に苛立つ。

「ちつ。アンタみたいなのがいるから俺らの仕事が大変になんだよ！」

俺らの仕事、と云う言葉に由岐は反応する。目の前の少年は明らかに十六、七位だ。仕事と云う言葉は似合わなすぎる。

「仕事って？」

少年は黙って細長い指を迫りつつある黒い物体へと向け、その腰に着いたホルスターから銃を取り出した。ニヤリと笑う口は野性的で、少しでも甘い言葉を吐けば、誰でも惚れそつだ。

「コレ」

そう云って引金を引き、振り返り打った。白い光線を発しながら進む弾丸を、少年の目は捕えて離さない。白い光線は黒いドロドロの物体へ突き刺さった。命中だ。

少年は長い金髪をなびかせてもう一度由岐を見た。

「さて、アンタの家は壊れたから、博士の所に行つて直してもらいな」

「はあ。ありがたいんだけど……」

博士とは誰だろう。さっきの銃は？ 由岐は聞きたい事が溢れて言葉に詰まったが、少年は待つてくれないようだ。由岐に着いてこいと言つように目配せして先に歩き出した。

サラサラの金髪と、頭にあるゴーグルが妙に印象に残った。

ロゲイン編 1

目の前にジジイが現れた。この間抜けで小さなジジイが博士何て呼ばれているとはちよつと考えづらいといつも思う。

電子化されて、一度こちらに来てしまうのが面倒臭いらしく、いつもあのクソジジイは映像だから現れたと言うよりは映し出されたと言う表現の方が正しいかもしれない。

先程俺が助け出した由岐とか言う気の強い女は博士を見て口をパクパクしている。サイバー空間に住んでいるとは言え、C・Pどうしの目には普段と何ら変わらない光景が写るために、クソジジイの映像は新鮮すぎたか。

ジジイはそんな事にはみじんも気付かずにベラベラ話しかけているが由岐は頷く事しか出来ていない。

このままジジイの長話に付き合わせるのも可哀想だからそろそろ助けてやるか。

「ジジイその辺にして、早く彼女の家を直してくれよ」

ジジイはちよつと怪訝な顔をしたが、由岐は助かった、と言う顔付きた。

「わかつとるわい。セニヨリタ、ウチの馬鹿が家を破壊したせめでもの償いじゃ。この家を受け取ってください」

由岐は驚いたが直ぐに礼を言った。ジジイが沢山いる管理者の長だ何て聞かされたら驚くかもな。

「ありがたいんだけど……まだ貴方の名前を聞いてないわ」

俺の方を見る。躊躇いがちに訪ねてくる姿はちよつと可愛い。俺はまたあの長つたらしい名前を言わなきゃいけないのか。

「俺はelectron.virus.buster」

「エレ……？」

だよな。長いし、覚えにくいから、やっぱり呼び名で覚えてもらおう。

「レクトって呼んでくれ。electronのeとronを取る
とこの名前になる」

由岐はゆっくり頷いた。

「あの、とても人の名前をに聞こえないわ……失礼ね？」

「いや」

聞かれ過ぎて慣れっこだ。大体のC・Pには俺は人にしか見えな
いらしいから、仕方がないのだけれど。

こういう面倒臭い話はジジイに任せろってやつだ。

「セニョリータ、こいつは人ではありませんぞ」

「えっ！？嘘……」

そりゃそうだよな、いまならジジイの方が人外に見えるから、説
得力なんて無いようなもんだ。

「ああ、俺は電子ウィルス除去システム。略してE・V・Bだ。つ
まり0と1で出来てる存在。アンタらとは作りが違うの」

言いながらゴーグルを上げると由岐は感心したように頷いた。「
だから、遠い場所から見たら青く見えたのね！」

そいつはご名答だ、セニョリータ。なんだよジジイ、睨むなよ。

「そういう事ですじゃ。こやつは電子で出来ているため遠い場所か
ら見たら電子と反応して電気の色素が見えるのです」

由岐は少し首を捻ながら懸命に理解しようとしているようだ。つ
か、今回の報酬が早くいただきたいんだが。

「そう急かすな。報酬ならここにあるわい」

クソジジイが俺の視線に気付いたらしい。……嫌なところだけ敏
感だ。

「報酬……？」

おっと、この先はあまり聞かないでおくれ。俺は無言で由岐の肩
を押した。由岐はまた遊びに来るわ、と言ったけど、俺がまたいつ
ここに来れるかわからないから、その時は宜しくとか言つといた。

「良いのか。またここに来るとは限らんのに」

「その方が良い」

俺がここに来る時はまたウィルスが出没したってことだからな。

……もしかしたらそのウィルスは、アイツかもだし。

「ふん。ではほれ、報酬じゃ」

クソジジイがカチツとブロック状のメモリーをインストールさせる。俺は目を瞑った。感情があるE・V・Bの俺が黙ってクソジジイの言うことを聞いているのは、このブロックの内容が欲しいからだ。

「何かわかったか？」

「アンタが渡してるブロックだ。何が見えたかはわかってるんだろ？」 ジジイはわざと思い出しかなのような仕草をした。バレバレだよ馬鹿。

「……髪が見えた」

「ほう、して？」

ジジイがこうしてわざとらしく質問するのは、ブロックの中身が自分の用意した物と一致しているかの確認でもあるのだ。

「黒髪……だったのか」

「そのようじゃの」

地面は、サイバー空間だから当たり前なのだが、何もない。拳を強く握り締めた。

「そろそろ、そっちにログオフするよ」

「お前の場合はログインじゃ」

ジジイがログオフ……じゃねえ、インボタンを押すと同時に俺はゴーグルを着けた。

通常ならば俺はE・V・Bだから実体化出来ないと考えるヤツも多いだろうから理屈を説明するよ。

プロローグを読んだヤツで頭が良いヤツは気付いているだろう。人口の増加に備え、実体を電子化するシステムと同時に電子物を実体化するシステムもできた。つまり電子で出来ちゃってる俺は実体化が可能なんだ。

そしてどうして俺がアンタたちの存在に気付いているか、とかそ

ういうのは、実は恥ずかしい話憶測の問題でこれがもし本当じゃなかったら、かなり恥ずかしい事をしている事になる。

クソジジイの仮説によると、ちょっと前の時代に今のサイバー空間システムの基盤となるシステムが出来上がった時代があったらしい。

えーっと、インターネットとかケータイとかそんなんだ。で、そんなにこのサイバー空間のウィルスが逃げ込んだりとか、破片が入ったりして、俺らのサイバー空間との繋がりが出来るらしいんだよ。で、もしかしたらそんな前の時代の方々が俺らの事を見ているかもしれない、って言うから俺は妄想して……じゃねえ想像して勝手に心の中で話してると言うかなり痛い、ジジイには口が裂けても言えない恥ずかしい事をしちゃってるわけ。

研究室のど真ん中に降り立つ。さて、早いとこ眠っちまおう。と、思った矢先に唐突に研究室のドアが開いた。

「博士……て、だれ？」

不味い。ジジイの部下にみつかったようだ。ジジイは俺の事を公開したくないらしいから、俺はこっちにいるときはあんまり目立たない様になっていた。

ジジイの部下は、俺を不審者と判断したらしく、壁にある赤いボタンに触れた。不味い！　ありゃあ非常用のベルじゃねえか！

次の瞬間俺はそいつの情けない短い叫びを口を押さえて止めながら押さえ込んだ。

「ガハハハハ！」

部屋中にクソジジイの笑い声が響く。正直煩いし、俺は早く寝てしまいたい。俺がさっき押さえ込んだ彼は申し訳なさそうに肩を縮ませている。

「して、レクトとカリンツは初対面じゃったか。だがカリンツにはレクトの似顔絵を渡していた筈じゃが……」

黒髪の青年はそのきちんと切り揃えられた髪を掻き上げ、ボロボロの眼鏡を押し上げた。

「いや、博士があんなに絵が苦手だ……ゴホン！ 博士の絵が芸術的過ぎまして、わかりませんでした」

カリンツはジジイの睨む視線を感じたようだ。うん、なんか気が合いそうだね。

「えーっと、君がレクト君だったのか。間違つてごめんなさい。俺は今度から博士の助手になるカリンツだ。よろしく」

でも。仲良くしてなんかやんない。だって俺にはやる事があるから。それを達成するにはコイツらに使われるしか道がないから。

「まあ、アンタも俺を使うってわけね。もちろん知ってるんだろあの事も」

憎しみがあるわけじゃないが、俺は立場上コイツに優しくなんか出来やしない。

カリンツは首を傾げた。

「ずいぶんと冷たいな。……あの事って一体なんなんだ」

「クソジジイ、話してねえのか」

「話して良いのか？」

「いや」

ジジイは一体何が目的だ？ 助手にそんな大事な事を話さなくても良いのか。

カリンツは未だ首を傾げていたが、あまり自分が踏み込む話で無いと判断したらしく、その後俺達は軽く雑談をして各自自室に戻った。

ログイン編 2

一瞬にして由岐のヒーローになった少年は、まだまだ正体不明だがまた会ってくれると約束してくれた。さて、家に帰ったら、早速デザイン画を描こう。由岐の足取りは軽い。

ジジイの下使われている俺、みたいなヤツは、実は多数いる。それぞれが感情があつて、特性も違うから個性的だ。俺達は、各研究室のPCからログオフしてウイルス除去を行う。

因みに俺みたいに物理的攻撃をしないと倒せない旧式の他、最新型のやつらは触れるだけで消滅させる事が出来るとか。

さて、ここでなぜ俺をジジイが実体化させるのかを話そう。

俺達は電子で出来ているためサイバー空間では繋ぎ止めておく事が出来ない。そこであのクソジジイが俺達を実体化させる装置を作った。

C・Pを電子化、実体化する装置と要領は同じだ。でも俺達は前も行ったように、0と1で出来ているために根本的な物は同じだけど出力装置に改善の余地があつたわけだ。

で、実体化された俺達は各研究室から繋がっているE・V・B townにログインする。townと言っても、町が実際にあるわけではなく、E・V・Bの情報交換の場であるバー等がいくつかあつて、その他は俺達個々体の寝室になっている。

俺達にとっては睡眠も食事也不需要ではないから、専用の娯楽施設みたいなもんだ。

「おい、レクトじゃねえか！」

振り向くと浅黒の肌と綺麗に揃った歯が視界に入った。思わず声そいつの名前を出していた。

「トロン……！」

俺達の間にも、友情は存在するが何せ多忙な仕事のため一度会っ

て仲良くなつても次また会えるかはわからない。とくに俺みたいな旧式のやつは特に。

しかし幸いながら、俺とトロンは五回も再会している。

「久しぶりだなおい！　ちょっと髪がのびたのか」

「ばーか、気のせいだよ。E・V・Bの髪がのびたらビックリだ」

そういうとトロンは手をヒラヒラと振って思い出したかのように笑った。

ここはtownでは一番人気のバーで、マスターと呼ばれる名前が不明の老人がやってる。料理はおいしいし、何より人が集まるから俺もここを使わせていただいてるんだ。

トロンは俺とほぼ同時期に造られたE・V・Bで、一度仕事で組んだ事がある。トロンはまあ座れよと自分の隣の席をあげ、俺が座るとわざとらしく、小声で聞いてきた。

「なあ、あの事は大分わかったのか？」

「この前は髪の色がわかった」

「あのジーサンも意地悪いな……微妙な場所じゃねえか。で、何色？」

「黒髪」

トロンはあからさまにエツと驚いた。俺も驚きだよ。今と全然違う。

「そりやお前……大層な変わりばえで」

俺の髪を眺めながら話すのに悪気が無いのは知ってる。そーいや、トロンは今回最新型の奴と組んだ筈だ。

「なあ、そーいや最新型、どうだった」

それを聞くとトロンはあからさまに眉根を寄せた。

「ああ……奴らが触れるだけで消滅させる事が出来るとか言うのはマジだ」

「なっ」

そりゃヤベエ。そんなことになったら、俺達なんか用済みだぞ？
「なんてな！　んなわけねえよ！　経験も浅いし、戦力にならない

から今後はあんまり数を増やさないようにする筈だぜ。ここもそろそろ狭くなつたしな」

白く揃った歯が光る。コイツに嘘を吐かれてもなぜか腹が立たないのは俺だけじゃないに違いない。

「ああわかつたよ。いつもの冗談ね。ありがとう。俺も明日は最新型の奴と組むんでな。早く寝る事にするよ」

俺が席を立つとトロンは中指に人指し指を載つけた。俺達がまた会えるために、「さよなら」の代わりに使う挨拶だ。

同じ事を返した後、俺は部屋に戻った。

ジジイの研究室には、カリンツの隣に気むずかしそうな男が立っていた。

「ユバ、アイツがうちのレクトじゃ。単純にelectronから名をつておる」

「……どおも」

ジジイが睨んで来た。何だよ。

「ドラクザン博士、これがウチのユキノです」

ジジイがユバと呼んだ男の隣には、ツインテールが何ともチャームिंगな少女がいた。につこりと笑ってみせる。

「宜しく願います」

凄く可愛い。でも俺はこの時物凄い違和感を感じた。

通常俺たちがログオフする時はジジイが発行するログオフ許可証がある。サイバー空間にはウィルスが星の数程もいるから、またたくまにあちこちらのサイバー住所区に現れる。

今回俺とユキノが除去するのはR10だ。通称リオ、と呼ばれている。R10をローマ字に見立てて読むとちようどりオとなるからだ。

だけど、その可愛らしい名前の反面、その能力は恐ろしく、電子化された人間がウィルスに感染した場合、PC上に表示されなくなり、存在が消滅してしまう事になる。

「レクト、早く支度をせんか。ユキノが待っている」

おっと、長話が過ぎたみたいだ。ジジイの機嫌を損ねると面倒臭いから、早いところログオフしないと。

「わーってるよ。……待たせたな」

俺とユキノはジジイの研究室の中央にある入力タワーへ立った。通常入力タワーは各研究室に一から二しかないが、ジジイの立場上ウチの研究室には四つも入力タワーがある。

「今回は1000258番地にウイルスが出現した。まだ人間が残っておるから、救出してからウイルス除去にかかること」

「わかったよ、ジジイ」

「……了解しました」

俺はやはりユキノに違和感を感じながらサイバー空間にログオフした。途中、少女の声が聞こえたのは気のせいかもしれない。

ユキノ編

俺はクルリと回転し、地面に足をついた。背中に背負っている刀を抜く。成程な、今回のR10はなかなか強いじゃねえか。しかも「集団とは聞いてないぜクソジジイ！」

俺達の耳の中には、オフの世界（現実）と繋がるマシーンが埋め込まれていて、それが三半器官や鼓膜の役割もしているのだが、同時に向こうからのジジイの声が聞こえる様になっている。

逆に俺達は専用のインカムを着けてログオフしなきゃならないからこちらの声もジジイの耳に届くわけだ。

「そっじゃったかの？」

誤魔化すなよ。大体二日前に最新型と組む事知らせといてまだ知らせてない事が有るなんてビジネスとして成り立たねえよ！

「だー！ もう、片付ければ良いんだろ？ そのユバって人、大方アンタの後輩だろ。断るに断れないし、見栄ってやつだな」

「……」

ジジイは無言だ。この場合の態度は大人気ないジジイだから、肯定としてとって良い。その代わり、今回の報酬は二倍だからな！

俺は必死に敵の攻撃を交すユキノをフォローしつつ、一体の背後を捕えた。

「うらっ！」

敵は真つ二つだ。はあ、やっと一体か。それにしても気になるのはあのユキノだ。

俺達E・V・Bにも感情は存在する。なぜなら……いや、ここでこの話をするとか長いからまた今度の機会に回すとして、ユキノは妙だ。

さっきユキノが攻撃を交すのを見て漸く気付いた。俺が見る限り、彼女は無表情なのだ。いや、正確に言うと表情はあるが目には光がない——そんな感じだ。

「――タスケテ」

そしてこの声。俺は敵の攻撃を交す。一回転して頭上を捕えたが逃げられてしまう。

さっきログオフした時に聞こえた気がしたのもきつとこれだろう。ユキノが背後を捕えた。今の今まで見る余裕がなかったためか気付かなかったがユキノの武器は……

「ど、鈍器……？」

「はっ！」

敵が潰れた。さ、さあ後一体だ！

「こりやまた、大層なデカさで」

最後の一体は他の二体を指揮っていたやつだ。俺がさっき逃してしまった。スピードも攻撃力もさっきの二体とは比べ物にならない。

R10が、俺に向かって液状の物質を飛ばしてきた。避ける。

「痛っ！」

何て攻撃範囲だ。右腕がやられた。ユキノも透かさず攻撃するが全くピンピンしてやがる。

「タスケテ」

こんな時にまただ。俺はとりあえず目の前の敵に集中することにした。

やっぱ、対ウイルス用弾丸を使うしかないか。対ウイルス用弾丸は、ウイルスを貫いた瞬間に特殊な液体が噴出され、ウイルスを固めてしまう効果がある。値段が高価だからあんまり使うとジジイに怒られるが、今回は仕方ない。

しかし対ウイルス用弾丸にはもちろん専用の銃が必要だ。銃には射程距離と言うものがつきものである。この距離はかなり厳しい。それにあまり近付くとまたあの液状の餌食だ。どうする？

考えている間にも敵が迫ってくる。ヤバイこれはピンチとか言うやつじゃ。考える俺……この弾丸を遠くに……野球みたいに打ち飛ばせば……ん。

「ユキノ……アンタの鈍器でコレを打てるか？」

直径僅か三センチメートル。長さ五センチメートルの弾丸ただ一発しか使う余裕はない。

「わからない……でもやってみます」

その言葉を信じるよ。今はそれにかけるしかない。

「じゃあアンタはこの弾丸だけを見ていてくれ。俺がちょうど良いタイミングで手を離すから思いつ切り敵に目がけて打つんだ」

ユキノは静かにうなずいた。俺はまたあの声が聞えたが、無視することにした。

敵が迫る。五メートル、四メートル、三メートル……

「行けっ」

ユキノが放った対ウィルス用弾丸は真っ直ぐに敵に目がけて飛んで行く。俺は一瞬も目を離さなかった。弾丸が迫っていく。敵の胴体へ、その薄い胸へ——命中！

「ぎゃあああああ！」

鼓膜が破けるような叫び声と共にあの声が聞こえた。

「タスケテ……！」

そうだ、この声、うん、それならつじつまが合うじゃないか。

「ユキノ。助けてやる」

ユキノは少し驚いた様な表情をしている。そうだ、ユキノなんだよあの声は。助けを求めるユキノの感情だ。

「アンタの感情はどこにいる？」

ユキノは少し躊躇う仕草を見せたものの、細々と話した。

「ユバ博士が持っています」

アイツ……そうか。ジジイの野郎最初からこれが目的だったのか。サイバー空間において、電子ウィルス除去システムには原則として感情を入れなければならない。これはジジイが決めた事だ。なぜなら科学的な根拠に基づいて、E・V・Bの人を助けたいと言う感情は大きな力を生む事を証明しているからだ。ただ問題はそれだけじゃない。もっと複雑な問題も有るわけだ。まあ、次回に回すとし

よう。

だがユバはジジイと反対の意見を持っていて、その良さを見せ付けるために今日の仕事が舞い降りたわけだ。

「ユキノ、良くやったね」

ユバがログインしてきた。手に持っているスニーカーには何が入っているんだ？

ユバは唐突にある方向を向きジジイに話しかけた。

「この様に感情はいりません。E・V・Bの感情はこのような」

ユバは懷からキューブ型の物を取り出した。

「キューブに詰めれば良い。キューブを開けて対象物に向けると感情を吸い取れます。因みにこれはユキノの物だ」

おっさん、詰めが甘いぜ。

「おつと悪い！ 足が滑った！」

俺は一回転してユバの手の中にあるキューブを蹴りあげた。落ちた衝撃でユキノの感情が戻ってくる。

「なっなにをする！」

「アンタの感情こそいらねえよ！」

俺はキューブをユバに向けた。

「うわあああ！」

後に残ったのは抜け殻みたいになったユバだった。

「ありがとうございます！」

ユキノはログインした後ジジイと俺に礼を言った。うん、今なら何の違和感もなく可愛いと思える。

「ジジイ今回は報酬二倍だ」

「わかつとるわい」

と、何だ。まだいたのか。

「あの、レクトさん、本当にありがとう……これはお礼です」
ん。え？ 頬に柔らかな感触が。

「若いって良いのう！」

「だあああ！？ ユキノ！ お前何して！？」

ユキノはニッコリ笑って答えた。

「キスですよ」

俺は暫くこの少女に振り回されそうだ。

ユキノ編その後

「今回は二倍だ」

「ちっ……」

てめークソジジイ。舌打しやがったな。

「インストールする」

俺はゆっくり目を閉じた。先ず脳裏に浮かんできたのは漆黒の瞳と高く筋の通った鼻。パーツの色は変わってても形は変わってないらしい。

「ふうん。まあこんなもんか」

前に俺はある情報が欲しくてジジイにこき使われている、と言った筈だ。あんまり話したくないけどアンタらが未来を作る人達だから、俺みたいなヤツも産まれてくるんだって事を知ってほしい。

今までの話の中に少しだけ顔を除かせていた俺の欲しがっている情報、それは己の姿だ。

ここからはちよいとストレンジな話になるから、覚悟しておいてくれ。俺達E・V・Bが感情を持つ理由は話したな。でも、それだけじゃない。もう一つどうしても感情を無くせない理由があるんだ。それは、E・V・Bは元々人間から出来たシステムだからだ。例えば、こんな事が起きたとしよう。サイバー空間内で人間が亡くなった。するともうその人間はそれなりの処置をしなきゃならない。だから通常は遺族の許可を得て火葬する。だが、遺族がいなかったら……？

収集がつかない遺体が積もってしまう。そこでジジイは当時かなり深刻な国際問題だったウィルス除去システムに改造したんだ。だから俺達にも感情があるし、寿命もある。体の構成物質が電子だからある程度成長したら老化はしないけど。E・V・Bの寿命は約百年間で、体に纏う電子が尽きた時点で消失する。話によるとまるで星になったかのように美しいらしい。

ジジイも長年かけて完璧なE・V・Bを造り上げる過程で人間に感情が必要不可欠であるように、俺達にも感情が無くてはならないものだと言ったんだ。

科学的な研究の下、ある囚人からあらゆる感情を取り除いた結果わずか三日でその囚人は亡くなったそうだ。

人間を元にしたE・V・Bは、構成物質以外は殆んど人間とかわりない。つまり、俺達も感情を取り除いたら死ぬってわけだ。

生産されたE・V・Bは戦闘のみに集中できるよう、生前の記憶を消去され、また生前の友人等にバツタリ出会ってしまった時の事を考慮して容姿を変えて耳にマシーンを埋め込む。……ちよいと残酷だけど、拾い手が無い遺体を倉庫に放置しておくよりはずっと良いと思う。

その事実を知ってるE・V・Bは数えるくらいしかないのだが、俺は昔、ジジイからその事実を聞いたんだ。

俺は、他のE・V・Bとは事情がちよいと違う。俺はジジイに拾われたんだ。俺は、生まれて三年くらいたった時にサイバー空間の人通りの少ない場所においてけぼりにされた。今冷静に考えたら捨てられたんだと思う。

食べ物もなくて終に力尽きて路上で瀕死の状態だったのをジジイが見付けて研究室まで運んだけど、もうその時には息がなくて、哀れに思ったジジイは俺をE・V・Bにした。

それから、俺は自分の姿を知るためにずっとウィルス除去をしてきた。ジジイが毎回報酬としてくれているのは、俺の容姿についての記憶だ。

それ以外の記憶は、ジジイは俺をウィルス除去に向かわせる気は無かったから残されただけだ。まあジジイも俺が自分の姿を知りたがるなんて思いもしなかった筈だ。

「なあ、父さん」

俺はふざけてジジイに向かって話しかけてみた。電子戸籍上、俺はジジイの養子なんだよ。

ジジイは

「ふん。お前に父さんなんぞ言われると気色悪いわ！」

と吐き捨てたが、その声に怒りは感じなかった。

明日はサイバー首都、ムルガリセブンに買い出しに行く。ジジイは忙しいからパシリだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0262c/>

E.V.B !

2010年10月21日22時09分発行